

## 永井理恵子氏報告「児童学でよむディック・ブルーナの世界」（〈児童〉における「総合人間学」の試み研究）

著者	田澤 薫
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.21
号	No.3
ページ	20-22
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1477/00003021/">http://id.nii.ac.jp/1477/00003021/</a>

<b>Title</b>	永井理恵子氏報告「児童学でよむディック・ブルーナの世界」(＜児童＞における「総合人間学」の試み研究)
<b>Author(s)</b>	田澤, 薫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 20-22
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3523">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3523</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 〈児童〉における「総合人間学」の試み研究 永井理恵子氏報告 「児童学でよむ ディック・ブルーナの世界」

田澤 薫

2011年度9月26日に開催された今年度第3回目の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会では、永井理恵子氏（聖学院大学児童学科）が「児童学でよむ ディック・ブルーナの世界」と題して報告くださった。ブルーナが影響を受けた画家の作品については、喜田敬氏（聖学院大学児童学科）が画集を示して解説を加えて下さり、ブルーナ作品とともに作品鑑賞を含む和やかな研究会となった。

以下は、報告内容の概要である。

ディック・ブルーナの代表作である絵本『うさこちゃん』（福音館）の主人公「うさこちゃん」は、講談社から出版されているものでは英訳を採用して「ミッフィー Miffy」と名付けられているが、言語のオランダ語では「ふわふわうさちゃん」を意味する「ナインチェ nijntje」と呼ばれている。

「うさこちゃん」は、シンプルな線で描かれ、大きく正面向きの顔は目と×型の口が特徴であるが、絵本として刊行される前の時期から現在に至るまでの間に随分はっきりした変化が見られる。色彩は限定されており、現実の動物の色として不自然な点があっても、その限定色の範囲で彩色される。

絵本「ちいさなうさこちゃん」シリーズは、1955年に第一作『ちいさなうさこちゃん』が刊行され、1964年に日本語版（石井桃子訳、福音館書店）が発刊となり、以来今日までに全33冊が発表されている。当初は縦長のサイズだったが、1959年以降は15.5×15.5cmの正方形となった。子どもがおもちゃの延長として絵本に出会うことを想定している。使用する色は6色（赤、黄、青、緑、茶、グレー）で、ブルーナ・レッド、ブルーナ・イエローと呼ばれる特定の色しか使われない。一貫して12頁で構成され、左に文章、右が絵という

形式を持っている。1冊の読書時間を10分と設定し、読み切る長さを意識している。

ブルーナは、自身の幼時期を通して得たさまざまな経験や記憶などを持ちつづけ、自分の中にあるそれらのものを作品に表現しているといわれる。言い換えれば、幼時期の「自分」に対して描いているのである。ブルーナ自身の言葉によれば、

「ミッフィーは素直でやさしくてあたたかい、うさぎの女の子。  
僕みたいに永遠の子どもなんです。

シンプルで誰にでも理解できるもの、

そして、最後にほっと幸せになれるものを、創像力の続く限り、作り続けるつもりです。」

（『e-mook』宝島社、2011年9月、p.3）と述べられ、「デザインはシンプルであることが一番大事。

完璧であるだけでなく、できるだけシンプルを心がける。

そうすれば見る人がいっぱい想像できるのです。

これがわたしの哲学。」（『ディック・ブルーナのデザイン』芸術新潮編集部編、新潮社、2007年7月、表紙カバー袖）と説明されている。



資料を示しながら報告する永井理恵子氏

ブルーナの絵本は、画家・作家の双方の側面からその特徴の分析できると言われている。絵画の専門教育を受けたことがないが、先人の作品に触れながら自らの表現世界を構築し、筆を使ってワンシーンに100枚以上を描き「この一枚」を模索する。一方の文章は、内容はきわめて日常的なもので、幼時期の体験が大いに反映される。作品には悪人が1人も登場せず、周囲の大人はうさこちゃんを愛し、その人格を1個の存在として認め、うさこちゃんは自分で様々なことを考え行動する。友達が多く、最近では人種の違う仲間や身体的特徴の違う仲間も登場し、そのなかでうさこちゃんは1人で考える。そして常にハッピーエンドとなる。

ディック・ブルーナは1927年8月23日に父アルバートと母ヨハナの長男として、オランダのユトレヒトにて誕生した。本名はヘンドリック・マフダレス・ブルーナであるが、母親からディックと呼ばれていたことから、後にディック・ブルーナを筆名とした。

父親のアルバートは曾祖父が設立した出版社を国内有数の出版社として育てた実業家で、自宅には作家や画家が多く出入りし、また絵本や詩集等書物が溢れていた。両親はディックに多くの本を読み聞かせ、また家族旅行にもよく出掛けた。「うさこちゃん」には外出場面が多くみられるが、家族との幼時期の思い出を描いたものであるという。脚に障害があったが、母親が矯正ギブスを取り替えるなどの手当てを丁寧に行ったことで、支障ない程度に軽快した。1931年に弟のフリッツが生まれ、一家はザイストに引っ越した。ザイストは美しい土地で、ザイストの家には広い庭があり、ブルーナ一家はここでいろいろな動物を飼ったほか野生の動物もまわりで見ることができる環境であった。作品中のさまざまな動物は、この時の経験が基になっているという。

ブルーナが4～5歳の時に初めて描いた絵はうさぎであった。幼児期よりうさぎを好み、よくう



作家であり、また画家としての面を持つブルーナについて、彼に影響を与えた画家たちの作品の図録を鑑賞しながら考察を深めた。

さぎと遊んだという。男子校であるモラヴィアン小学校在学中は一人遊びを好み、読書や製作活動に時間を費やした。学習では、絵画・生物・語学が得意で、物理・化学・算数が苦手だった。中学校はミッションスクールに進んだ。

1940年に、ブルーナ一家はフェルトホーフエンに疎開をした。ここでブルーナは、ピアノとアコーディオンに熱中する。作品の中にアコーディオンはよく登場するのは、この時の影響とみられる。絵画ではレンブラントやゴッホに傾倒し、よく画集を鑑賞したという。

1943年、ブルーナ一家はロースドレヒト湖畔の小さな家に転居し、ここで「地下生活を送る」と言われている。この時期のブルーナは、風景画を油絵で描きそれをバターや砂糖と交換して家計を助けた。

終戦後に一家はヒルバーサムに移り、そこでブルーナは高校に通うが中退し、ユトレヒトやロンドンの書店で見習修行をしたり、パリの出版社で見習いをしたりするなど、父親の勧めで出版に関係する諸体験をする。17、18歳の頃からロンドンやパリの美術館を端から見て歩き、ピカソ、レジェ、デュフィ、中でもマティスの絵に強い刺激を受ける。「絶対に絶対に、描きすぎではいけない」という発見はこの時期になされたという。

「複雑にしすぎではいけない。シンプルで見る人にイマジネーションを働かせなくてはならない。デ・スティルを提唱したオランダの芸術家たちの手法に戻りなさい」と主張した。

父親からは出版社を継ぐことを期待されていたが、本のカバーを作り高い評価を受けたことを契機として絵を仕事としたいと考えるようになった。しかし結婚相手の父親に就労を求められ、それを機に父親の出版社に入職した。ここで『ブラック・ベア・シリーズ』の装丁に取り組んでポスター賞を受賞し、大ヒットした。

装丁の仕事を多く手掛けた時期に、『ちいさなうさこちゃん』が生まれる。「うさこちゃん」を描くにあたっては、「絵本の装丁もポスターも限りなくシンプルでなければならない」（『ディック・ブルーナのすべて』講談社、2005年、p.60）という哲学が貫かれていた。「ブルーナカラー」と言われる4つの色を決め（ただし、後にノアの方舟をテーマとした絵本を作る際に緑・茶・グレーを足した）、形は最も単純化しラインは一本線を筆で描いた。文章にもこだわり、韻を踏んでいる。初期の童話作品シリーズには『きいろいことり』、『こねこのねる』、『ぴーんちゃんとふいーんちゃん』、『ちいさなさかな』『こいぬのくんくん』などがある。

1970年に勤めていた父の出版社を退社し、友人とメルシス社を起業し、絵本の創作に専念するようになった。メルシス社は、ブルーナ作品、商品の商標、版權を扱っている。

1990年代には社会福祉に関心を広げ、血液バンク、障害者支援、小児性血友病支援、視聴覚障害者支援、ユニセフや民間ボランティア団体からの依頼を受けて作品を発表し、これらの活動に幅広く関与した。絵本の主題も変化を見せ、「うさこちゃん」が泣いたり問題行動をとったり、社会的ないじめ問題と闘う場面も描かれるようになり、人種問題・障害もテーマとして取り上げられ、主人公の「うさこちゃん」がより人間的な存在へと

変化し、作品主題が社会性や現実感を増してきた。

ブルーナの作品に影響を与えた画家としては、モンドリアン、マティス、デュフィ、レジェ、リートフェルト、カルダーがあげられる。このうち特に強い影響力があったとみられるのが、モンドリアンとマティスである。美術館を訪れるテーマの作品のなかで、ブルーナはモンドリアンの作品を鑑賞する「うさこちゃん」を描いている。ブルーナの根本的な部分はモンドリアンによるところが大きいことを感じさせる象徴的な作品といえる。

モンドリアンはオランダ出身の新造形主義の創始者で、自然は垂直と水平の要素から確立すると考え、その純粋な自然理解に立脚して色彩は三原色のはずだと考える。そのため、作品製作において他の色を足さない。一方のマティスには、ブルーナは戦後のパリで出会う。マティスは、一般にはモローの弟子と考えられているが、宗教絵画で知られるルオーと懇意になり影響を受けあった。マティスは80歳を超えてから新しい自分の世界に挑戦しようと切り紙による作品製作に着手し始め、1952年（ブルーナの絵本の刊行は1953年である）にブルー・ヌード作品のシリーズを発表する。マティスが使用する色は、赤と青と緑の光の三原色を基本にするが限定はない。しかしながら、この両画家から強い影響をブルーナは、絶対に紫を使わないのである。色彩の用法からも、作家の系譜を読みとることができる。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）